

# 新頌

北原白秋

青空文庫





# 海道東征

# 海道東征

## 第一章 高千穂

男声（独唱竝に合唱）

神坐<sup>ま</sup>しき、蒼空<sup>あをぞら</sup>と共に高く、

み身坐<sup>ま</sup>しき、皇祖<sup>すめらみおや</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなり我が中空<sup>なかぞら</sup>、

窮<sup>きは</sup>み無し皇産靈<sup>すめむすび</sup>、

いざ仰げ世のことごと、  
あめ天なるやたか崇きあれみ生を。

国な成りき、綿津見わたつみの潮しほと稚わかく、  
こ凝り成しき、この国くに土つち。

はる邈かなり我が国くに生うみ、  
 おぎろなし天あめの瓊ぬほこ銚、

いざ聴けよそのこをろに、  
おほやし大八洲あが騰るとよみを。

皇みすまる統あまてや、天照らす神の御裔みすゑ、

代々坐しき、日向すでに。  
よよま  
ひむか

邈かなり我が高千穂、  
はる

かぎりなし千重の波折、  
ちへ  
なをり

いざ祝げよ日の直射す  
ほ  
たださ

海山のい照る宮居を。  
うみやま  
みやゐ

神坐しき、千五百秋瑞穂の国、  
ま  
ちいほあきみづほ

皇国ぞ豊葦原。  
すめぐに

邈かなり我が肇国、  
はる  
はつくに

窮み無し天つみ業、  
きは  
あま  
わざ

いざ征たせ早や東へ、  
た

光宅みちたらせ 王みう沢つくしびを。

## 第二章 大和思慕

女声（独唱竝に合唱）

大和やまとは国のまほろば、  
たたなづく青垣山あをがきやま。

東ひむがしや国の中央もなか、  
とりよろふ青垣山あをがきやま。



うるは  
美しと誰ぞ隠る、  
誰ぞ天降るその磐船。

かな  
愛しよ塩土の老翁、  
きこえさせその大和を。

やまと  
大和はも聴美し、  
その雲居思遙けし。

うるは  
美しの大和や、

うるは  
美しの大和や。  
やまと

第三章 御船出

男声女声（独唱竝に合唱）

その一

日はのぼる、旗雲の豊とよの茜あざに、  
いざ御船出みふねいでませや、うまし美々みみつ津つを。

海風ぎぬ、陽炎かぎろひの東ひがしに立つと、  
いざ行かせ、照てり美くはしその海道うみぢ。

海風ぎぬ、朝あほらけ潮しほもかなひぬ、  
艦ともへつ船接ぎ、大御船おほみふね、御船出みふなで今ぞ。

## その二

あな清明さやけ、神倭かむやま磐余彦いはれひこ、その命みことや、  
あな映はゆし、もろもろの皇子みこたちや、その皇兄いろせや。

行でませや、おほらかに大御軍、  
 まだ蒙し、遥けきは鴻荒に属へり。

慶を皇祖かく積みましき、  
 正しきを年のむた養ひましぬ。

神柄や、幾万、年経りましき、  
 暉や、かつ重ね、代々坐しましぬ。

和み霊、また和せ、ただに安らと、  
 荒み霊、まつろはぬいざことむけむ。

おほみいつて  
大御稜威い照らすと御船出成りぬ、  
みこ  
日の皇子や、御銚とり、かく起ちましぬ。  
みほこ

その三

日はのぼる、旗雲の照りの茜を、  
あかね  
いざ御船、出でませや、明き日向を。  
あか ひむか

海風ぎぬ、満潮のゆたのたゆたに、  
みちしほ  
いざ行かせ、照り美しその海道。  
くは うみつち

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮しほもかなひぬ、  
ともへつ 艦舳接ぎ、おほみふね 大御船、みふなで 御船出今ぞ。

#### 第四章 御船謡

男声（独唱竝に合唱）

#### その一

みふなで 御船出ぞ、  
おほみふなで 大御船出、

御伴船みともぶね挙りこそさもらへ、

御伴びみともとこそ挙り仰げや。

揺りゆとよめ科戸しなどの風と

声放て、東に向きて。

大御船おほみふね真梶まかぢし繁ぬき、

照りわたる御弓みゆみの弰ゆはず、

あな清明さやけ、神にします、

あな眩まばゆ、皇子みこにします。

はろばろや大海原おほうなばら、

涯はてなしや青水沫あをみなわ、

揺りゆとよめ大き国民くにたみ、

おほきみ  
大君に、

この神に、

たたごと  
讚へ言、

よごと  
寿詞申せや。

その二

荒海の、

荒海の潮の八百道の、  
やほぢ

やしほぢ  
八潮道の、

潮の八百会に、ハレヤ、  
やほあひ



とどろ坐ます速開津姫はやあきつひめに、

あさびらき

朝開、朝のみ霧の

とほじろ

遠白に、

すむじづ

末鎮み

しづ

鎮まらせ、

み眼すがすがと笑ゑんませとぞ、

きこしめせと申さく

み船ふなうた謡。

その三

い

ヤアハレ

うなばら  
海原や青海原。

ヤアハレ

あをぐも  
青雲やそのそぎ立、  
たち

きは  
その極み、こをば。

おほきみの  
我が海と大君宣らす、

そら  
我が空と皇孫領らす。

ろ

ヤアハレ

潮しほなわ漚のとどまるかぎり、

舟への舳の行き行くきはみ。

ヤアハレ

島かけて、やそしま八十嶋かけて、

おほうみ大海に舟満ちつづけて。

見はるかしおほきみの大君宣らす、  
四方よもつ海皇すめみまし孫領らす。

は

ヤアハレ  
くにつち  
国土や、おほくに大国土。

ヤアハレ  
国の壁かべそのそぎ立たち、  
その極み、こをば。

我が国と大君おほきみの宣らす、  
我が土と皇孫すめみまし領らす。

に

ヤアハレ

青雲あをぐものそぎ立つきはみ、  
白雲しろくもの向伏むかふすかぎり。

ヤアハレ

谷たにぐく蟻のさわたるきはみ、

馬の爪とどまるかぎり。

見はるかし、おほきみの大君宣らす、  
よも四方つ国すめみまし皇孫領らす。

ほ

ヤ 狭さの国は広くと、  
ヤ

嶮<sup>けは</sup>し国<sup>たひ</sup>平らけくや。

ヤ

遠き国は綱<sup>つな</sup>うち掛け、

もそろよと、

もそろと、

国引くと、引き寄すと。

あなおほら、<sup>おほきみの</sup>大君宣らす、

あなをかし目翳<sup>まかげ</sup>しおはす。

善<sup>え</sup>しや、善<sup>え</sup>しや、  
弥<sup>いやさか</sup>栄。

とどろとどろ、  
弥栄<sup>いやさか</sup>。

第五章 速吸と菟狭

その一

男声独唱

海原<sup>うなばら</sup>や青海原、  
海道<sup>うみつぢみちびき</sup>の導<sup>み</sup>や、早<sup>はや</sup>や槁根津<sup>さをねつひこ</sup>日子、  
速吸<sup>はやすひ</sup>の水門<sup>みと</sup>になも、その珍彦<sup>うづひこ</sup>。



童声或は女声合唱（童ぶり）

亀の甲に揺られて、

潮しほの瀬に揺られて、

かぶりかうぶり海あまの子こ、

棹さをやらな、附ついまるれ、

波かぶりかぶるに、

み船へと移らせ、

名をのれ早や早や、

み船へまる出づるは

臣やつこぞとそれまをす。

国つ神と這はひこごむ。

潮みづく国つ神、

海豚いるかの眼まみ見よな、

遠眼とほめ、鋭眼とめ、慧さかしな、

羽はぶり羽はぶりおもしろ。

その二

男声女声（交互に唱和竝に合唱）

菟狭はよ、さす潮の水上、

豊国の行宮。

ああはれ 足 一 騰 宮とよ、 行宮。

足 一 騰 宮は、 行宮と

青の岩根に 一 柱 坐す。

大わたの亀や、川のぼり来る。

足 一 騰 宮に参出ると、

足 一 騰 宮の大御饗、

誰たがたてまつ、はるか雲居に。

足あし一ひとつつああががりりののみや  
騰たか宮みやは菟う狭さ津つ彦ひこ、

朝あしたささももららふ、夕ゆふべささももららふ。

足あし一ひとつつああががりりののみや  
騰たか宮みやは湍たぎののみや、  
足あし一ひとつつ騰たかりり、雲うののみ辺べにままま坐ます。

ええしや、をしや、

ええしや、をしや。

## 第六章 海道回顧

### その一

男声女声（交互に唱和竝に合唱）

かかなべて、日を夜を、海原渡り、  
かかなべて、將た歳を、宮遷らしき。

ああはれ、その幾歳、

ああはれ、その行き行き。

年ごとに、御伴船、いや数殖えぬ、

つぎつぎに、御従びと、またいや増しぬ。

ああはれ、また春秋、

ああはれ、そが海山。

その二

月の端や、足一騰宮、

一年や、筑紫の崗田の宮。

多祁理とも、阿岐の埃の宮、

たづたづや、ななとせ七年や。あはれ。

吉備きびにして、また八年やとせ、高嶋の宮、  
大和はも遠しとよ、高千穂よ遙けしと。

その三

かがなべて、日よるを夜を、海うなばら原渡り、  
かがなべて、将はた歳としを、宮遷らしき。

ああはれ、その幾いくとせ歳、

ああはれ、その行き行き。

満ち満つや、み蓄たくはへ、早やかく成りぬ、  
あめ天の下ことむけむ、秋とき今成りぬ。

ああはれ、えしや、

ああはれ、今ぞ秋ときや。

## 第七章 白肩の津上陸

### その一

男声（独唱竝に合唱）



あをぐも  
青雲の白肩しらかたの津つ、その津に、  
雄をたけびぞ今あがる、御船みふね泊はてぬ。

いざのぼれ大御軍おほみいくさ、

いざ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

なみはや  
浪速なみはやの辺へに騒あぢがもぐ味あぢがも髡あぢがもや、その渚すを、  
追おほみいくさひ押しに押しおほみいくさのぼり、み楯たてな竝たてなめぬ。

いざのぼれ大御軍おほみいくさ、

いざ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

## その二

くさかえ たでつ  
日下江の蓼津、その津に、

雄たけびぞ今あがる、おほみいくさ大御軍。

いざのぼれ、大和は近し、

いざ奮へ丈夫ますらをの伴とも。

なみはや うしほ さかのぼ  
浪速の潮なし遡ると、

我が行かば何はばむ、ながすねひこ長髓彦。

いざのぼれ、大和は近し、

いざ奮へ丈夫ますらをの伴とも。

第八章 天業恢弘

男声女声（独唱齐唱竝に合唱）

神坐<sup>ま</sup>しき、蒼雲<sup>あをぐも</sup>の上<sup>うへ</sup>に高く、

高千穂<sup>くじふる</sup>や 触<sup>たけ</sup>峯<sup>たけ</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなりその肇<sup>はつくに</sup>国、

窮<sup>きは</sup>みなし天<sup>あま</sup>つみ業<sup>わざ</sup>、

いざ仰<sup>おほみこと</sup>げ大御言<sup>おほみこと</sup>を、

畏<sup>かしこ</sup>きや清<sup>さや</sup>の御鏡<sup>みかがみ</sup>。

国<sup>くに</sup>ありき、綿津見の潮<sup>しほ</sup>と稚<sup>わか</sup>く、  
 光宅<sup>みちた</sup>らし、四方<sup>よも</sup>の中央<sup>もなか</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなりその国<sup>くに</sup>生<sup>うみ</sup>、

かぎりなし天<sup>あま</sup>つ日嗣<sup>ひつぎ</sup>、

いざ継<sup>つぎ</sup>がせ言<sup>こと</sup>依<sup>よ</sup>さすもの、

勾<sup>まが</sup>玉<sup>たま</sup>とにほひ綴<sup>つづ</sup>らせ。

道<sup>みち</sup>ありき、古<sup>いにしへ</sup>もかくぞ響<sup>ひび</sup>きて、

つらぬくや、この天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなりその神<sup>かむ</sup>性<sup>さが</sup>、

おぎろなしみ<sup>つるぎ</sup>劍よ太刀<sup>たち</sup>、

いざ討たせまつろはぬもの、

ひたに討<sup>う</sup>ち、しかも和<sup>やは</sup>せや。

雲蒼し、神<sup>かみ</sup>さぶと弥<sup>いや</sup>とこしへ、

照り美<sup>くは</sup>し我が山<sup>やま</sup>河<sup>かは</sup>。

邈<sup>はる</sup>かなりその国<sup>くに</sup>柄<sup>がら</sup>、

動<sup>ゆる</sup>ぎなし底<sup>すめら</sup>つ磐<sup>いは</sup>根<sup>ね</sup>、

いざ起<sup>すめら</sup>たせ天<sup>あめ</sup>皇<sup>みこと</sup>、

神<sup>かむ</sup>倭<sup>やまと</sup>磐<sup>いは</sup>余<sup>ひこの</sup>彦<sup>のみこと</sup>命<sup>こと</sup>。

神と坐ます大稜威高領おほみいつたかしらせば、

八あめのしたひと紘いへ一つ宇とぞ。

邈はるかなりその肇はつくに国、

涯はても無し天あまつみ業わざ、

いざ領しらせ大和やまとここに、

雄たけびぞ、弥いやさか栄を我等。

建速須佐之男命

建速須佐之男命

枯山の巻

第一段

をを、  
をを、

をを。



神ぞ居れ、喚び哭く

冥き神、

かむさが  
神性や、霹靂と

たけだけ  
猛猛し、ひと柱、

しや、須佐之男命、

たけすさのを  
建速佐之男、

はやすさのを  
速速佐之男、

ひたぶるや、益良神と

あら  
暴ぶる荒御魂の大童

雄叫び、

泣きいさち、

たたら  
踏み、

蹴く急はららかすや、

纏まき、放はなつ湯津ゆづつ爪つま櫛くし、

美豆みづら良振り乱り、

拳こぶしたたき、

搔かい垂たらす、胸むな前さきや

振り分わつ八やつか握かひげ髭ひげ、

鳴なりとよむ御統みすまるの御珠みたま、頸珠くびたま、

手纏たまき、釧ひぢまきや、

ゆらかす足玉あしたまの緒いともゆらに

揺り立て、

揺り荒すさべば、

凄まじ、この生はてみ終はての神、

さながらや、海うなぎか阪あがりの昂騰

押し移る

かんだちぐも  
神立雲、

はやて  
早手風、飛ぶ電光、

あをみづち  
とどろ立つ蒼の虬、

かきづめ  
閃めく搔爪いらの焦ちを、巻なだき崩れて

うろくづ  
覆す鱗魚の大降り雨、

かく嘆なげば、

おら  
かく哭なき喚おらべば、

泣き腐くたし、泣き噪はやれば、

うち冥くらむ世のことごと、

降り腐くたすそのことごと、

海河も泣き涸くらすと、

しとど垂なる長霖ながつゆ雨や、ああ、

光無し、時無し雨、

日も無し、

夜よはも無し、

ただ恋こほし、妣ははの国、

ただ遠とほし、根ねの堅かた洲すく国、

鬱おほにただ、鬱おほに泣こもき隠こもりぬ。

第二段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚おらび哭なく

冥くらき神、

おどろしき神かむさ性の、

ひたぶるの人性ひとさがの、

しゑや、縦よしや、善よき悪よしき、

ただ歎おほしけく暴風雨おほしけの神、

霧立つや八雲立つ

出雲の子ら、

おほうから大族、くにつこ国造のみおやがみ祖先神、

しや、たけはや建速すさのをのみこと須佐之男命、

この命ぞ、

ほ秀に見る空のさきざき、

眼に見る国のまほろば、

たたなづく青垣山は

青山のいはね石根、木の立、

神弱り、くた泣き腐すと、

神さぶと、枯山と泣き枯らすと、

息<sup>おきな</sup>長の息嘯<sup>おきそ</sup>の風と

雨呼<sup>あめ</sup>ばひ、哭<sup>な</sup>き喚<sup>おら</sup>び、泣<sup>な</sup>き隠<sup>こも</sup>れば、

日<sup>ひ</sup>を竝<sup>な</sup>べて、夜<sup>よ</sup>を竝<sup>な</sup>べて、かく歎<sup>なげ</sup>けば、  
鬱<sup>おほ</sup>にただ鬱<sup>おほ</sup>に冥<sup>くら</sup>む。

かくなれば、世の神神、

をを、神神、

清<sup>まさ</sup>明<sup>や</sup>けき、ひとしほに和<sup>にぎ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>、

顕<sup>あき</sup>らけく、美<sup>いっ</sup>くしき、

常<sup>とこ</sup>そよぎ、奇<sup>くし</sup>ふる神、

山<sup>やま</sup>と野<sup>の</sup>の精<sup>いき</sup>霊<sup>すだま</sup>、

大山津見、

鹿屋野比売かやぬひめ二柱の神、

そが持ち分けて生みませる神、

もろもろの生きの産巢むすび、

大地おほつちの草分くさわき、木の神くくのちのかみ久久野智神、

末すえずゑの岐わかれの神、

澄みわたる神境ひもろぎや、

斎槻ゆづき、湯津真椿ゆづまつばき、

葉はひろくまがし、

巖いつかし櫃くわや、白禱しろかしや、処女檀をとめまゆみ、

ああ、黒檜くろび、雲懸かかるさるをがせ、

雪の上への白樺や、



水<sup>みな</sup>上<sup>かみ</sup>の石楠の神、

柁<sup>ひひらぎ</sup>や、ひらきそよご、

繁<sup>しみ</sup>み立つ馬<sup>あしび</sup>酔木、黒木、

磐<sup>いはむら</sup>村の犬大羊齒、

沼<sup>ちがや</sup>辺には茅萱、葦、髪がやつり。

もろもろの鏡葉や、

霞<sup>かすみばり</sup>針<sup>ほそ</sup>、織<sup>ほそ</sup>き葉の神、

落葉木や、

若<sup>わかもえ</sup>萌<sup>もえ</sup>の光る木の芽、

花<sup>ごも</sup>隠<sup>へご</sup>る杪。

それを何ぞ、泣き枯らすもの、

日に奪ひ、夜に奪ひ、雨ふらせば、

ありとある立のたちことごと、

ありとある色のことごと、

勢きほひ無し、臥こやり撓たわむと、

すべしなし、立ちも滅ぶと、

水みの気け尽き、素もとちから力尽き、

ああはや、匂失せぬ。

### 第三段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く、

冥き神、

しや、童、速須佐之男、

大天や高天原、

日は治らせ、大日靈貴、

さもこそや夜之食国、

夜は治らせ、月よ月読、

海原、吾はえ治らさじ、

言依させ、吾は聴かじ、

神柄ぞ、暴ぶる神、

胆きもぶと太まなじりの眦裂くと、

言拳ぐと、泣きいさち、

抗あらがふと、おぞえ吼え立つ。

かく、吼え立てば、

大海よ、あをうなばら滄海原、

引き引きに歪ひずみ退しぞき、

潮干るや、干潟泡立ち、

沸き立つや、さそり蠍なすもの、

菊石きくめなす、むなぎ鰻なすもの、

鰓えらの怪けや、飛ぶ翼はねの竜たつ、

八やつるぎ剣の蜥蜴草食み、

始祖鳥みおやどり荒き齒くに咋くふ。

青水泥あをみどろひどらが沼、

蟠わだかまるぬめりうはばみ蟒、

憚らず

曠野あらぬおほうし巨牛、

畏る無し

禍まがつ狼。

をを、をを、をを、

かく経れば、降りつづく雨をもちて、

蛆あざ沸き、れ、蒼蠅さばへなす神神のおとなひ、

万よもづ四方つ神の災、

高津鳥の災、

昆はふ虫の災、

脂あぶらなす、逆吐あえづき、嘔吐たぐり、

生あやみ、殺あやめ、疼あやき、呻によぶ

もろもろの邪よこしま、

曲まり、朽くち、饑すゑ、死しぬる物の穢けがれ、

常とこ無く、火ひの気き無く、

耀はかず、祓はらひ了らへず、

下した心こころ澱たぎみ、

清すまず、障さやり、

嚏はなひり、瘡おこり障さやり、

※<sup>あぐ</sup>しく、焦<sup>いら</sup>だたしく、

苦しく、息づかしく、

瘡<sup>くさつみ</sup>病、搔<sup>たは</sup>き淫ると、

醜<sup>しこ</sup>つ神、追ひ挑むと、

ことごとや世のことごと、

堰<sup>せ</sup>きたぎち、

泣き、言問ひ、

挙り泣き、泣きなづみて、

ああはや事起りぬ。

#### 第四段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く、

冥き神、

果しなし、泣きいさつと、

海岸や上高岸、

巖窟なす岩戸、沙面、

腹這ふ大海胆の

紅殻や、生死殻、

鏝釘のここだくの釘



その根、もとあら幹疎もとあらにうち埋めて、

開き葉の高張りや、

大葉蘇鉄、

をを、をを、

をを、

滴るや長雨ながめしづき、

水松布みるめなす美豆良みづら雫き、

苔むすや、ももただむき股、臂、

細螺しただみと珠みたまい這ひ、

畳菰はかま禪破れ裂け、

小鈴落ち、あゆひ脚結紐解け、

はららぐと、その短裳みじかも、

空見ず、ただ歎けば、

海見ず、ただ歎けば、

しや、伊邪那岐大神いざなぎのおほかみ、

埴も無し、建須佐之男たけすきのを、

汝みまし、

言ことよ依さす国は治しらさず、

何もかも泣きいさちる、

父みかみのの御神詔りたまへば、

伊邪那美いざなみよ、僕あが母、

妣ははま坐せば、

根ねの堅かた洲すく国くに、

僕あは恋こほし、罷まかりゆかずば、

ただ哭なくと泣く。

ゑや、愚かや、

な住みそ、さば、此の国原、

行まかけ、罷まかれ、

神かむがら柄がらぞ、もとな流さす浪らへ、

神やらひやらひたまふと、

ああはれ、建たけ須す佐さ之の男を、

眼しらも白しらみ、追しひやはられ、

泣わらき涸わらし、はた、嗤わらひぬ。



# 大陸序曲

## 跳躍

跳躍する

跳躍する奔牛は是れ、

巖たる意志力、

陀々だだら羅踏む肉塊の黒旋風、  
くろつむじ

響き搏うつ角つの、

響き搏うつ角つの、

角は見よ、蒼き兜の  
おほまへ大前立。  
だち

此処は鄂博——蒙古兒陀羅海、

春ながら冬、

霾つちふらす、霾つちふらす茫漠たる内蒙古、

涯しなき視野、

東へ東へと移動しつつある沙漠の

凜然たる寒気の底に於て。

おお、眼だ、——昼闌けた円日ゑんじつ、

耀く耀く十方の日あし、

しかもまた金色こんじきの光を奪ふ

濃い青の上空である。

微塵の星、

よく磨かれた気流。

光は光をうつ、

影は影と、

萌え立つ草の芽も何処かにある。

誰知らぬ物の窪にも

何か湛へる。

——何事かある。

跳躍する、



跳躍する奔牛の意志に乗つて、

思ひもかけぬとどろきが来る。

すばらしいいきどほり憤に似た

光るばかりの或物が来る。

あしおと登音が来る。

## 十三時半の風景

根があつた。

カオリヤン高梁の枯れた畝うねなみ竝、

(満洲鄭家屯郊外)

黄色い土、

積み竝べた土糞、  
どふん

ああ、それだけ。

木があつた、

ひとつひとつに

影を落した枯木であつた。

ああ、それだけ。

平らかな、或は柔かい

うねりのなぞへ、

日向はほどよく温んでゐた。  
ああ、それだけ。

マアチャア  
幌車マアチャアが遙かを通つた。

白い馬に赤が三頭、  
土けむり、

ああ、それだけ。

茫漠とした南満洲、  
はてしのない川、結氷、  
銃眼のある土塀、

風、風、風、

ああ、それだけ。

苦力<sup>クリー</sup>よ、

四等車の苦力<sup>クリー</sup>よ、

小さな日だ、

十三時半——十五時半、

汽車はただ駛<sup>はし</sup>つてゆく、

駛<sup>はし</sup>つてゆく。

ああ、それだけ。

# 路傍にねむる

戦争画報を見て

ひた疲れ、ああ、このごと

路の端はしにねむる人、

命いのちなり、赤き陽ひに

こんこんとうち伏しぬ。

正しきはまじろがず

あめつち おもて  
天地に面ふらず、

戦士、守護神、  
いくさびと まもりがみ

身をさらし、髭も凍る。  
ひげ こごる

なべて見よ、この姿、  
昼も夜もここに無し、  
祖国のみ、民族の  
血と肉と、一つのみ。

まつろはず、信なき  
まこと

満蒙のかの匪賊。

憤る、憤るもの、

力なり、ためらはず。

戦へば勝つ人も

眠<sup>ぬ</sup>る間<sup>ま</sup>無し、小床<sup>をじこ</sup>無し、

せめて今、銃<sup>つづく</sup>又むと

ひきかぶるものも無し。

涙せよ、この姿、

昼も夜<sup>よ</sup>もここに無し。

ここにあり、土のうへ、

ひたぶるにねむる人。

暁天

日向高千穂峯の御来迎

日向ひうがの高千穂の峯

山の肩かた黝くろきに

風すでに矢羽やば根ね切りて

響ひびきわたり、空へ翔かけぬ。

おお、  
神かみがみ々々、



神つどひ、早も立たすと、

あかつき  
暁、来たり立たすと、

戦を手に、東の方

まかげ  
目翳しましたつ。

蒼雲よ、国原

いまだ覚めず、

野も川もをさなくて

かたな  
形成さず。

動けり、ただ、

雲の上の湖の魚

顎あぎとあけ朱あざに燃えて。

日の出なり、

ああ、朝日子あさひこ、

千別ちわくと、雲のかぎり千別ちわくと、

小さきかなや、浄きよきかなや、耿かうと照りぬ。

## 種子

## 大陸序曲

種子<sup>たね</sup>ありき、神<sup>かむす</sup>産<sup>むす</sup>び玉と凝<sup>こ</sup>るもの、  
かく在<sup>あ</sup>りき、在<sup>あ</sup>りて生<sup>か</sup>き、香<sup>か</sup>は蘊<sup>つ</sup>みぬ。

土<sup>こ</sup>なるや、大<sup>あ</sup>き陸<sup>あ</sup>蒙<sup>ら</sup>古<sup>こ</sup>の底<sup>ひ</sup>ひかく、  
隠<sup>こ</sup>らひぬ、鉞<sup>あ</sup>と石<sup>い</sup>との隙<sup>ひ</sup>埋<sup>ま</sup>れ。

時<sup>と</sup>ありき、日<sup>ひ</sup>も知<sup>し</sup>らず、星<sup>ほ</sup>も別<sup>わ</sup>かず、  
ただ在<sup>あ</sup>りき、かく在<sup>あ</sup>りて千<sup>ち</sup>五<sup>い</sup>百<sup>ほ</sup>万<sup>ろ</sup>の歳<sup>とし</sup>。

驚<sup>おど</sup>けよ、この命<sup>いのち</sup>、靈<sup>たま</sup>びに若<sup>わか</sup>し、

讚ほめあげよ、かく古りてかく全またけし。

世よよ々ありき、人は興り、地に満ち満ちき。

国興り、将はた滅び、また代よよ々ありき。

つちふふ  
霧つちるや、黄すななる沙、嵐たけと哮たけび、

みなぎ  
漲みるや、洪おほき水、天あめ傾かたぶけぬ。

なほ在ありき、生きの芽の命か薫をすと、

俟しつありき、つひに来るそが黎の明め。

海を越え、空を蔽ひ、とどろ来るもの、  
地響や、音爆はせて翼搏うつもの。

誰ならず、日ひの御裔みすゑ、久米大伴が後のち、  
神々の我が登音あのと、大皇軍おほみいくさ。

俟まつありき、大き陸くが、今かがやけり、  
さ緑や、はてしなくよみがへるもの。

種子たねありき、神産かむむすび玉と照るもの、  
命なり、息づくくと芽ぶきそめぬ。

狙ひ

しづかなり夏空、  
なつぞら

軍の真上、  
まうへ

畏ろしく形無きもの  
おそ

風をはらむつかのま。

敵なりや、稚き  
をさな

将た生物、  
は いきもの

現れ、また現れ、

視野は透<sup>とほ</sup>る。

響無し、声も無し、

氣息のみ

輝やかし時秒のみ

満ち、いきるる

ひたおもて、黄<sup>き</sup>の土<sup>つち</sup>。

軍はあり、草をかつぎ

山のごとしづもる戦車、

晴<sup>せい</sup>眼<sup>がん</sup>にひたと向ひ、

未だ<sup>ま</sup>放たず。

そのはじめ、<sup>あめつち</sup>天地

創<sup>つく</sup>られて新<sup>あらた</sup>に、

俟<sup>まち</sup>つありき、何<sup>なに</sup>ごとかの

一<sup>いっ</sup>の動き。

どとと射<sup>や</sup>つ我<sup>われ</sup>か、彼<sup>かれ</sup>か、

このたまゆら、

勝<sup>かち</sup>つ者の正<sup>ただ</sup>しき狙<sup>ねら</sup>ひ

神<sup>かみ</sup>のみぞ知<sup>し</sup>ろしめすらむ。



## 熟眠

陰<sup>かげ</sup>はあり巨<sup>おほ</sup>き戦車、

据われり休らひのあひだ、

道のべ、

響<sup>さば</sup>なす蒼蠅<sup>へ</sup>のみ

集<sup>たか</sup>り集<sup>たか</sup>る。

ねぶたし、ただ

疲れはてて、

空も無し、仇も無し、

戦いくさ、小止をやみ。

命なり、張り満つる

五日いつか、六日むいか、

夜よも無し、朝も無し、

飲まず、食はず。

我射ちぬ、彼射ちぬ、

しかも大暑、

何ごとのしらすぞとも

知らず、射ちぬ。

強しとも弱しとも

誰か分わかむ。

ねぶたし、ただにまぶたに瞼の

重く垂り来く。

もぐりて、深くもぐりて、

兵なり、我ら、ねむる。

戦車よ、鉄の戦車、

しばしを、

ああ、しばしを光蔽へ。

ねぶたし、

ただに眠ると、

何も無し、我も無し、

ひた土に額ぬか押しあて。

真昼ぞ、ただ虚むなしき。

饑うゑたりや、饑うるともいざ、

生きむとも死なむとも

將た思はず。

ねぶたし、ただねぶくて  
早や識しらず戦いくさも、弾丸たまも、  
ねぶたし、眠らしめて  
つかのま母の声聴かしめ。

## 突撃

突撃、  
突撃するもの、  
突くなり、突きまくり、

ひた刺し、刺しつらぬき、

銃床逆手さかてもろに

飛び入り、はたきのめし、

はたくや、たたき斃す、

これのみ、ただこれのみ。

突撃、

突撃するもの、

ひたぶる、ひたぶるなり、

生しやうし死無し、邪無しよこしま、

戦ひ、戦ひ恍惚ほれ、

突き刺し、たたき斃し、  
声のみ、息あるのみ、  
我あり、跳ぶあるのみ。

突撃、

突撃する時、

ただ見る、命ある、醜き、

顔ゆがめ、まなこ眼ひらき、

恐れに、きも胆へし消え、

わななき、わななくもの。

敵なりや、彼なりや、

將た知らず、

斃れに、ただ斃れぬ。

響きて、ひと斃れぬ。



清明古調

## 白須賀

遠州浜名郡白須賀

白須賀は昔の宿、

ただ白し、ものさびで、

その蒨しとみ、はひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、  
軒のきなみ竝なみの

同じ型、

出で、はひる人すらや、

同じ影。

音も無し、なにひとつ、

埃づくものも無し。

草屋のみ、

弱き日のあたりたる。

いづこそ遠江灘、

潮見坂ほどちかくて、

薄ら曇る低き空を

風も来ず。

冬ながら、その屯たむろ、

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしとも、

おもほえず、寒しとも。

白須賀は旧街道、

朱の鶏冠とさかふりたてて

軍鶏しやもの居れども。

そは暮のひとあかりのみ。

三宝寺池

閑けさよ、しづ三宝寺池、

桜咲き、

桜の枝に

人居りて釣竿垂れぬ。

閑けさよ、しづ三宝寺池、

石神井や、しやくじゐ

鉾<sup>ほこすぎ</sup>杉むら、

影は沈む、緑青の水の面<sup>おもて</sup>。

閑<sup>しづ</sup>けさよ、三宝寺池、

昼<sup>た</sup>闌けし日ざしに

枯れ枯れの葦、

片<sup>うきぐさ</sup>明る菱、浮萍。

閑<sup>しづ</sup>けさよ、三宝寺池、

潜<sup>かづどり</sup>き鳥、かいつぶりの

よく響きて、

ともすれば連れ走る、頭のみぞ。

閑しづけさよ、三宝寺池、

雲は行き、

春は雲間に

なにとなくまだなごみぬ。

## 真夏

真まなつ夏なり、

鉄塔のよき間かんかく隔、

ちちと、ちちと、

飛び撓たわむ

鳥。

子らよ、観みよ、

噴ふきあがる雲、

青あをがや萱と田の稲と

照りうつる

空。

真まひる昼なり、



街道のバスの埃、ほこり

スロープのさみどりに

開く窓、

ああ、八月。

唐辛子

花咲きて、

ほのぼのと

人と家、

炎天の野に歪ひずみぬ。

# 神苑

## 明治神宮西参道

幽<sup>かす</sup>けさや、この日なかの  
邃<sup>ふか</sup>き木の木<sup>こ</sup>しづく。  
開<sup>き</sup>けよ、声<sup>きぎす</sup>を雉子、  
外<sup>と</sup>の霞に。

たふとさや、神苑の  
光<sup>ひ</sup>る陽<sup>ひ</sup>の櫃<sup>かしわかば</sup>若葉、

閑けさや、黝くろみ闌たくる  
こもごもの青と緑。

とどめじ、塵ひとつ、

玉の砂敷きならして、

清すがすが々し、参道の

うねる徑こみち、こを行かばや。

芝生や、緩るきなだり、

宝物殿、

白きは隠こもる夏の

花のえご、香のひとつもと一本。

よく観よ、にぎたま和み靈に

吾が幼子、をさなご

亀の子の揺る影を、

ひれ鰭、さざなみ。

しづもれよ、ひるまあらし昼間嵐、

うつつ現ながら、

ほのぼのと雲は立ち、

神と人息いぶ吹きかよふ。

西山莊

閑<sup>しづ</sup>かだ、

幽かな谷ふところ、

何か野鳥が来て動かす  
かれはざふき  
枯葉雑木。

よく晴れた

塵ひとつない空、

こ木ぶかい庭、

まだ寒いその清明。

簡素だ、

飛び飛びの石、

萱の屋に衝き上げ門、

ここは西山荘。

ほの  
微かだ、

ひび  
罅われた皮膚に

影が移る、古木の梅が、

咲くには早いその匂が。

ああ、さうして

音が徹る一つに、

あ、心字池、

大日本史の精神、その響が。

悠々たる老楽、

いさぎよい魂、

おいらく  
たましひ

わたしは聴く、水の音に、

義公を、水戸の黄門。

## 雪朝

清明<sup>さや</sup>けさや、この雪、

ふりおける雪につみ、

木々につみ、

燈籠にしろくつみぬ。

神<sup>かみがき</sup>垣<sup>がき</sup>や、このあした、

石<sup>いはし</sup>走る水の音の

うちひびき、

氷柱<sup>つらら</sup>みな新なり、日の光に。



この雪に跡つくる、

兎なり、跳び跳びて。

すがしきは笹の芽食む

毛の柔もの、幼し。

満ち満つ忝さ、

何事も畏くて、

息づきぬ、

国の秀ほの山高きに。

神ながら、この道に

ああ我や言ふすべなし、

おほみこ  
大皇子の生れまして

春まさきに雲ぞ騰あがる。

かしはで  
拍手、

かしはで  
拍手ぞ、ただ。

## 白樺

すが  
清しきは雪に立つもの、

白樺の林よ、げに

しろき木肌、こはだ

そは真処女。まをとめ

かす幽けさよ、雪の溪たにに

すぐた直立ち、ほそき幹の

雪よりも光帯びて。

日は曇り、しろき真昼、

声も無し、このかがやき、

風も無し、色ひといろ。

閑しづけさよ、興安嶺、  
ひえびえとけむる梢こずえ、  
鷹すらも一羽飛ばず。

何すとか、ここに住む

白系露西亜、  
貧まづしきは浄きよらかに窓ひらきで。

白夜はくやともほのあかる  
空ひととき、

白樺の林よ、げに  
光る神々かみがみ。

## 竜胆

青淀の岩壁がんぺきをかく穿つもの、  
滲しみいづる滴りの淡水まみづとは誰か思はむ。

など知らむ、しばしばも吹き通ふ雲、  
上うはぬめる織ほそき根のありとある脈すぢさぐるを。

末そよぐ蔦の葉や、わづかにも紅<sup>あか</sup>み交ると、  
 み冬なり、石<sup>いはばし</sup>走る滴<sup>したた</sup>りの、また雫くと。

目も澄むや、岩<sup>いはかど</sup>角や、よく開きて、  
 濃き藍の竜胆ぞ、よく冷<sup>ひ</sup>えたる。

## 本栖湖

本栖湖<sup>もとすこ</sup>のへうべうたる、

往き、消ゆる

薄墨の雲に、

しろがねの燻<sup>いぶし</sup>して。

たださへや幽<sup>かす</sup>けきに、

懸巢啼きて、

雨は隠<sup>こも</sup>る木のま、

不二の裏べ。

山の上<sup>へ</sup>の畏<sup>こ</sup>さよ、

月円く

現れて、

また白し、隈だちつつ。

来<sup>きた</sup>るのみ、過<sup>す</sup>がふのみ、

雲しばしば、

霧<sup>き</sup>らひつつ、動きつつ、

後<sup>さや</sup>清けく。

神は坐<sup>ま</sup>すや、この暁、

ああ、波<sup>なみしわ</sup>皺、

風を思ふ姫鱒は水に棲みて、

また沈みぬ。



煙霞余情

## 丸彫

丸彫まるぼりに我ほを彫ほる。

この眼やいばの刃。

丸彫まるぼりのこの木彫。

細すかくも、素すに荒。くも。

丸彫まるぼりのこのもしさ

我彫。らむ、みづからを皆。

丸彫まるぼりのてづつなさ、

触れつつも、この己れ。

丸彫まるぼりよ、息つめて、

息かけて、いとほしと。

丸彫まるぼりのうるはしき、

こを見よと我思ふ。

丸彫まるぼりに刻きざむもの、

我ならず、何かある。

丸彫まるぼりに彫ほりあげて、

その白き手に献げまし。

## 微笑

微笑ほほゑみはそよ風、

かぎりなく果はてなきもの、

奥みづうみふかき湖のさざなみ。

微笑は眼に湛へ、

おのづから頬にのぼるもの、  
声無くして調ある声。

微笑は明るくして

つつましく玉つつむ絹、

炷きこめぬ、そのまごころ。

微笑のやさしさは

愛し児の上かかる愛。

常秘めて常に満ちぬ。

微ほほゑみ笑を保たもてよ、

閑しづかなる世よの母、

昼ひるながら藤らうたき月、

ありなしの雲うさながら。

微ほほゑみ笑はそよ風、

かぎりなく果はてなきもの、

ただにあれ、影かげなき眉

輝かがやきは君きみにあらむ。

日なた

風に思ふ、

そよかぜ  
微風よ、

かくのごと閑しづかなる日ざしありやと。

菊のはな匂ふ日なた

なにか遊ぶ女めわらは童の

振りかへるに。

おもほえね時の移り、

空<sup>むな</sup>しとも、迅<sup>はや</sup>しとも、  
ただなごむを。

女<sup>め</sup>童<sup>わらは</sup>は遊ぶのみ、

さだめなき秋の日の

それぞとも眼に見えねば。

しばらくは事もなし、

蜻蛉羽<sup>あきつば</sup>のゆきかひの

時ひかる道しるべ石。



風にそよぐ  
陽ひのいろや、

月のごとをりふしを遠く行きぬ。

## 道の手

ふるさとや、わが母の  
この山の手、

昔見しさながらを  
ただしづかに。

闌<sup>た</sup>けたり櫛<sup>は</sup>若<sup>じ</sup>葉<sup>わか</sup>、  
ば

池も見えて、

壁<sup>い</sup>赤<sup>へ</sup>き山の家の

ひとつふたつ。

築石や、棚畑や、

ふかき昼を

日の照り、

時うつる、この片<sup>かた</sup>岨<sup>そ</sup>。  
ば

影はあり、独<sup>た</sup>佇<sup>た</sup>つ

よき童、  
わらはべ

おもぎし、我かとも、  
いま見上げつ。

鶯鳥うそどりよいづくにか

鳴き、くくみて、

色、匂、さまわかず、

風なるか、空なるかも。

北の関せき、南の関せき、

この道の手、

我は見る、我が昨日きのふの  
をさなごころ。

水の上

気色けしきのみ、  
風かぜにのみ  
言ことづてむ、  
この句を。

水の上へに

ふる雨の

しばしばも

輪に点<sup>う</sup>ちつつ。

旅やどり

すべなしや、

窓に見て

日をおくれば。

ほのぼのと

咲く花の

よき樗あふち、

夏となりぬる。

こさめひたき

色はあり、声にのみ、

こさめひたき、

雫のみこまかなる

この朝あけ。

花はあり、影にのみ、

ひとりしづか、

香かのみ寂びたもつ

杉よ檜。

巢は懸かかる、高くのみ、

ウメノキゴケ、

気色けしきのみ、母鳥おやどりや

姿、羽はぶり。

現うつあり、しろくのみ

濡るる光、

卵のみ、おそらくは  
四つか五つ。

色はあり、声にのみ、

こさめひたき、

雫よ雫よと、

ただ幽かに。

月に寄せて

ことと  
言問はむ、



鉄塔の上に坐す円かなる月読の神、  
ふたみ  
二三すぢ細み引く茜の雲。  
あかね

刈りしほと麦は刈り入れぬ。

昼貌のほめきも過ぎぬ。

いぎ挙げむ琥珀のグラス、

時惜む夕ひぐらし。  
ゆふ

影のみの紫ながら

野に色む靄もあるなり。

虚むなしきは

虚むなしきは酒のみかは、

影のみの色もあるなり。

## 晩冬の詩情

晩冬いさぎよの月に思ふ遊子は  
潔く酒盃を嚙む。

凜烈たる霜、

霜は湖畔の鉄塔を嚙む。

灰くわいぎん銀の煙突を嚙む。

鴨だ、光つて潜かづく

青首鴨あをくびは葦かびを噛む。

ああ。轆轤こいしと礫は噛む、

車だ、唐辛子を積む車だ、

犬よ、その真紅しんくのこぼれを噛め。

春だ、すぐ、

ここへ酒盃を噛む。

## 台南旅情

もの憂うさや、老酒ラオチウや、

瓜クエチイ子はとり食めども、  
にほひなし、昼はまだ  
彩燈の切子硝子。

空あだなりや、

雲に行く日のまぼろし、  
ゆゑわかず、うつつなし、  
女童めわらべは言問へども。

梅雨つゆぐもり

影にのみ、朧たけて、

低くのみ

アアチウ

烏秋の飛びたわむと。

濡れがちや、

朱の寂びや、

そむね  
反り棟の 碾瓦、

せきかんろう

赤嵌楼。

クエチイ  
瓜子、 瓜子は眼の下のちひ小ほくろ黒子

齒にあてつつ、

齒にあてつつ、

愚<sup>おろか</sup>しく美しく時は過ぎぬ。

註。瓜子（西瓜のたね） 烏秋（台湾鳥）

赤嵌楼（蘭人の所謂プロヒレンチャ城なり）

## 蕃童

蕃童は<sup>キヨン</sup>仔を射る。

蕃童は弓矢手<sup>た</sup>ばさみ、

蕃刀を玉と取り佩く。

蕃童は母をうしろに、  
敢て立つ、岩根蹴放つ。

蕃童は朱砂をよろしと、  
風向ふ草をよろしと。

蕃童は仔を射る、  
竜眼の木ぐれうかがふ。





長唄  
元寇

長唄 元寇

第一段

天てんに連る玄界の

際涯はたてはいづく壱岐対馬、

夕浪千鳥群れかへる

蟹あまの小舟をぶねのそれならで、

山かと高き兵船へうせんの

満々と張る真帆の数、

櫓やぐらに撓たむる石火矢に

軍鼓しらせいきの調旌旗とどよもし、

舳艫相接つぐ九百余艘、

入日に染まる船脚ふなあしや

とどろと洗しほふ潮の手を、

しや、ひた押しおしの陣がまへ

松浦まつらさしてぞ押し寄せたる。

## 第二段

## 雲の峯

涌くや渚のさきさき

えきば

駅馬しきりに嘶けば、

すは

驚破こそ夷敵来襲と

じやうげ

上一下ひとしく色を失ひ、

また風騒ぐ谷の松、

やつ

今に知る法華経の行者日蓮が

ふうかん  
諷諫、

まさしく、他国

侵逼難とは之なんめり。

しんぴなん

### 第三段

抑々蒙古ときこゆるは

さうまう草莽にして胡沙こさを馳驅し、

万里北に蔓つて

いきほひ勢漢土に臨むや、

金を滅ほろぼし、宋を傾け、

余威高麗に及んでは

しばしば本朝をもうかがふ。

世界吞吐げんの元の野望

敢て挫かん鉄石の、

この人ありや執権時宗、

観ずれば明鏡止水のごとく、

断じては山河ことごとく震ふとかや。

曳くや竜たつの口、

冴さえは一刀、

死者の素すかうべ頭あたま勿なねざまに

大喝してぞ立つたるは、

げにおそろしき国きこつ胆いそ、

由々しくもまた勇ましし。

#### 第四段

星月夜、

鎌倉山のほのぼのに

早や駈け向ふ東国勢を待たばこそ、

今を危急の国難とて、

すなはち<sup>こそ</sup>挙る鎮西は、

探題太宰ノ少弐、

菊池、大友、

島津、竹崎の将兵を初めとして、

所在の土豪、

庶民、婦女子に至るまで、

必ひつちやう定ぢやうは公武ぐわん一丸いちわん、

老も若きも、

恥あらば、

死ねや死ねとぞ、

有り合ふ鎧、物の具引きかけ、引き締め、

えいやえい、

えいおう、

おうおうえいや、

えいえいえい、

弓きゆうば馬ば 刀たうぢやう杖ぢやうとりどりに

我も我もと馳せ集る。



## 第五段

日の本は

一天万乗の大君にましまして、

我が御代を

かかる乱れのあさましや、

神に御願ごぐわんをかけまくも、

忝いくもおん命いのち召まさせたまはむ、

代らめと

歎なげかせたまふ畏おそこさよ。

あさぎよめ  
朝 潔、

いすず  
五十鈴の川の御手洗水や、

ぬさ たむけ  
幣を手向の男山、

げかう  
勅使下向と聞くからに

ごりやう  
御陵の杉の昼闌けて

日の色添ふる蝉しぐれ、

護摩の煙のしまらくも

籠り絶えせぬ寺々山々、

いづれは異国調てうぶく伏の、

はらはらはらと 大般だいはんにやしんぎやう若心経、

物々しくぞ奉る。

## 第六段

敵は名に負ふ大陸の

銅羅のかけひき、騎きじやう乗の功者。

縦よしや火くわとん遁の術ありとも

我に鍛への太刀劍、

香取鹿嶋の神代より

正せいだい大あつまここに鍾あつまれば

やはかゆるがむ此そなへの備、

照覽あれや皇くわうてん天くわうど皇土。

海行かば水漬く屍、

山行かば草むす屍、

また顧みぬ防人さきもりの

昔ながらの雄たけびや。

水城みづぎ、博多は多多良が浜の防塁、

別しては箱崎の宮の大前、

一步も上げじ許すなど、

獅子奮迅に射放ち落せば、

波を潜くぐつて輕舸けいかの面々、

漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ、

日本にっぽんこく国は四国の住人河野みちありノ通有、

いで物見せん、夷えびすばら原、

月は弓張る幸さいさき先に、

倒ほぼしらす檣渡りに船と

乗りかけ、つけ入り、斬り込んだり。

## 第七段

頃しも弘安四年、うるふづき閏七月の朔ついたち日、

ああら不思議や、

きやう京にては

晴れに晴れたる夏空に

一朵の黒雲神かむた立ち現れ、

白羽はいだる鏑矢の

見る見る輝き鳴動して、

たちまち西へと飛び去りける。

それかあらぬか志賀の嶋、

海の中道、灘かけて、

俄に起る一夜の颶風ぐふう。

あやめもわかぬ暗闇くらやみに

裂けてつんざく稻妻や、

滝なす雨は百ひやくらい雷の

音と轟く物凄さ。

騰あがるは天てんの竜巻と

逆巻おらき喚おらぶ狂瀾怒濤、

頼め頼めの錨も何の

船は木の葉の漂ふごとく、

ちやりやきりり、

きりやきりり、

ちやりやきりり、

きりやきりり、

ちぎるる鎖、命の友綱、

舷げんげん々相つうち潰つえて、

さしもの元げんぞく賊ぞく十万、

あはれや千尋せんじんの底の藻屑となり了んぬ。  
をは

これぞ神風。  
かみかぜ

ちよく  
勅をして

祈るしるしの神風に、

寄せくる波ぞ

かつ砕けつる。

寄せくる波ぞ

かつ砕けつる。



# 制作年表

# 制作年表

昭和五年

十三時半の風景

昭和六年

路傍にねむる

跳躍

昭和七年

三宝寺池

真夏

建速須佐之男命

丸彫

昭和八年

晩冬詩情

竜胆

本栖湖

月に寄せて

白須賀

神苑

雪暁

昭和九年

雪朝

道の手

水の上

こさめひたき

台南旅情

蕃童

日なた

昭和十年

西山莊

微笑

白樺

昭和十一年

曉天

昭和十二年

狙ひ

突撃

昭和十三年

種子

昭和十四年

長唄 元寇

熟眠

海道東征



# 卷末記

## 卷末記

此の詩集『新頌』は些か皇紀二千六百年記念として上梓するものである。

収むるところ、三十一篇、その数は至つて尠い。ただ重要作としての長篇三品があつて幾分の量を加へてゐる。長唄「元寇」は別として、詩は前集『海豹と雲』（昭和四年版）以後の作品の中、その精神と詩風に於て、ほぼ同型のものを選んでここに蒐めた。

一に貫通するところのものは日本精神であり、整律するところのものは万葉以前の古調に庶幾く、概ね四音五音六音の連鎖であ



る。この傾向はもともと、『海豹と雲』の「古代新頌」その他に因を發し、今日に及んでゐる。私の最近の主流を成すものである。私としての蒼古調である。

思ふに、古人の胆を搦むにはその感動律を奪ふに如くはない。蒼古に溯つて之を求めようとした真意はここにある。

かくしてここに収めた諸作品は概ね同種同律のものであつて、之は編纂の主意が單一と整齊に存するからである。

この詩風以外の、短詩短唱、或は小曲風のものまたはまた別冊として編輯の上刊行する予定である。近代風の詩作品もまたここには割愛した。でこの蒼古調は私の詩風のすべてを示すものではないのであるから、右は諒承せられたい。

さて、ここに本集収録の作品に就いて、章を別つて、少しく解説して置く。

### 海道東征

この交声曲詩篇は、皇紀二千六百年奉讚の芸能祭に際し、日本文化中央聯盟の囑に依り特に作詩したものであつて、信時潔氏之を作曲し、今秋、上演の予定である。なほ、この交声曲は、今度の国家的祝典に際しその公式のものとして選定、東京音楽学校に於て発表、畏くも 皇后陛下の行啓を仰ぐ筈になつてゐる。

作詩に就いては、眼疾最悪の時に当り、ほとんど難渋した。読

みも書きもならない状態にあつたのである。で、古事記日本書紀等のそれらの資料は、妻や娘に、習字帖大に筆写してもらつた。無論大方は読ませて聴いた。作も口述が主であつた。機構が稍々大きく、歌ふものとしての整齐を節々句々或は字脚、アクセントの上に必要とし、相当に複雑してゐるので、眼を瞑つてただ心頭に案配し調律することは容易でなかつた。

さて、この「海道東征」はもともと 神武天皇讚歌として日向御進発より橿原の宮に於ける御即位に至る迄の結構を初念としたが、創作中、白肩ノ津御上陸に筆が及ぶ頃は既に制限された紙数を費して了つた。実演に要する予定の時間をも超過することになり、全体の三分の一に達せずしてうち切るの止むなきに至つた。

で、早めながら、天業恢弘の一章を以て、一応の締めくくりをつけた。何れは之を前篇として、中篇後篇を成すべきであり、三部作として完うしたい考であるが、今は之を独立した一篇のものとして置く。

なほ、かうした交声曲詩篇の創作は、自身にとつて最初のものであり、日本に於て、その範例を見ることを得なかつたので、眼が見えぬ上に、全くの暗中摸索であつた。しかしどうにか口述を了つてみると、更に進んでこの形式に向ふ氣組もできて来たやうである。

### 建速須佐之男命

昭和七年盛夏、自分達の季刊誌『新詩論』の創刊に際し、油然而たる感興を得て書き下した。この「建速須佐之男命」はこの「枯山の巻」に続いて、「参上りの巻」「宇気比の巻」「出雲の巻」を纏める筈であつたが、偶々その発表誌を喪つたため、中絶して了つた。

主として古語古調を用ゐたのは、古事記以来の古語を自己の薬籠中に一応の整理を為て置きたかつたのである。生かすだけは自分のものとして生かすべきだと思つたのである。のみならず、品詞の古語の使用が頻出する為の調和の上からも考へられたのであつた。自由詩形としたのは、曩に謂ふところの古人の感動律を掴

むに最も適切と信ずる表現を欲したからである。なほ思ふところがあつて、この篇には漢語を一語をも使用しなかつた。

内容の本筋は古事記に依拠し、日本書紀とその異本とを参酌した。構成に就いては、自己の解釈を以てし、更に近代の感覚と文  
化史的想像とを以てした。須佐之男命に就いての私の解釈は私と  
しての見解である。私は彼の命を必しも暴悪神として居らぬ。童  
心ある勇猛の、極めて男性的な英雄神とし、また偉大なる、最も  
人間らしい神として考へてゐる。

なほ、私は何れは古事記を近代人の知性と感覚とを以て、改め  
て解釈しなほさうと考へてゐる。さうして之を詩に移入したくひ  
そかに希つてゐる。で、この一篇は之等の片鱗に過ぎない。

## 大陸序曲

事大陸に關したものを主として蒐めた。私が滿洲に遊んだのは、その事變前であつたが、何となく風雲の穩かならぬものが感じられた。「跳躍」の中には何か来るべきものの蹙音が示唆されてゐる。

「種子」の一篇は、交声曲「大陸」の序曲となるべきものである。今次の事變に於ける作詩は未だ極めて尠い。恰も眼疾に罹り、その機を失つた。他日の集成を期したい。

## 清明古調

清明心を以て直入しようとした自然景情の幾篇であつた。中には依頼された雑誌の向によつて、多少平易な表現を用ゐた作もある。但し、之等の古調は私のものである。

## 煙霞余情

余情のみ、ただ幽かな煙霞。

長唄 元寇



この長唄「元寇」は皇紀二千六百年祝典に際し、かの「海道東征」と同じく日本文化中央聯盟の嘱により作歌した。長唄としては私の処女作である。作曲は稀音家浄観翁の手に成る。

内容に就いて云へば、元寇といふ一大国難に於ける日本精神の顕現を骨子とした。所謂公武一丸となつて神洲を守護し、外敵にあたる。而も上御一人をはじめ奉り、下は庶民に至るまで正しく挙国一致の体勢のもとに、国体の尊厳と、皇道の大本、然してまた日本武士道の精華とを表現しようとした。世にいふ神風もさることながら、尽すべきことを尽して蒙古勢を撃破し得た執権時宗の胆と、皇軍の忠勇無比とがこの篇の眼目となるのである。この

長唄は本年四月二十六日、歌舞伎座に於て公演せられた。各流家元をはじめ長唄界総動員の豪華演奏で、空前の盛事であつた。因みにその夜の出演者は左の通りである。

作曲 稀音家 浄観

作調 福原 百之助

作調 望月 太左吉

第一段 第二段 第三段

杵屋 六左衛門 杵屋 佐吉 笛

梅屋 竹次

長 杵屋 藤吉

三 杵屋

佐次郎

小

鼓 福原 百之助

中村 六松次

味 杵屋

佐三郎

小

鼓 福原 春之助

唄 杵屋 六真次

線 杵屋

勝吉治

大

鼓 梅屋 左十郎

杵屋 勝五郎

杵屋

太十郎

太

鼓 梅屋 金太郎

## 第四段 第五段

吉住 小三郎

稀音家

浄観

笛

望月 長之助

長 吉住 小太郎

三 稀音家 三郎治

笛

住田 又三郎

吉住 小七郎

稀音家 六四郎

小

鼓 望月 左吉

吉住 小文郎

味 稀音家 四郎助

小

鼓 望月 吉三郎

吉住 小桃園

稀音家 四郎吉

大

鼓 望月 吉之助

唄 吉住 小鉦次

線 稀音家 四郎太郎

太

鼓 望月 長四郎

吉住 小五郎

稀音家 八郎

太

鼓 望月 寿蔵

## 第六段

吉住 小四郎

稀音家 和三郎

笛

望月 長之助

長 吉住 小桃次

三 稀音家 六四郎

笛

住田 又三郎

吉住 小真次

稀音家 五郎

小

鼓 望月 左吉

吉住 小兵衛

味 稀音家 六郎

小

鼓 望月 吉三郎

吉住 小吉郎

稀音家 和三助 大

鼓 望月 吉之助

唄 吉住 小伝次

線 稀音家 三郎 太

鼓 望月 長四郎

吉住 小三八

稀音家 和喜次郎 太

鼓 望月 寿蔵

第七段

稀音家 六四郎

稀音家  
六郎治

稀音家  
八郎

稀音家  
四郎助

稀音家  
四郎吉

稀音家  
四郎太郎

吉住  
小真次

吉住  
小七郎

吉住  
小源次

吉住  
小五郎

稀音家 和喜次郎

吉住 小伝次

三  
稀音家 四郎雄

吉住 小三郎  
長 吉住 小平次

稀音家 五郎

吉住 小吉郎

長 吉住 小三蔵  
稀音家 六郎

吉住 小郁郎

味  
稀音家 和三助

唄 吉住 小桃次  
吉住 小兵衛

稀音家 三郎



吉住 小太郎

吉住

小文郎

稀音家 四郎兵衛

吉住

小桃園

線

稀音家 六八郎

吉住

小敞次

長 松永 和風

稀音家 和桃次

吉住

小鉾次

唄 杵屋 六左衛門

稀音家 四郎滋

吉住

小靖次

稀音家 和三次郎

吉住

小健次

稀音家 浄観

稀音家 四郎作

三 杵屋 勝太郎

稀音家 四郎一

味 稀音家 和二郎

稀音家 六吉次

線 杵屋 佐吉

稀音家 六一郎

杵屋 栄蔵

稀音家 政次郎

吉住

小都蔵

吉住

小喜蔵

吉住

小雅次

唄 吉住

小寛次

吉住

小紀彦

吉住

小喜雄

笛

鼓

望月

長四郎

鼓

望月

吉之助

鼓

望月

吉三郎

鼓

望月

左吉

住田

又三郎

望月

長之助

吉住

小三八

小

吉住

小与作

小

吉住

小英次

笛

太

大

鼓 望月 寿蔵

制作年表について

制作年表は簡単にした。詳しい創作及び発表目録は、各年の白秋年纂『全貌』に採録してあるゆゑ、参照していただきたい。この期間は短歌の創作に没頭した為に、詩作は極めて少かつた。

以上。

昭和十五年九月

阿佐ヶ谷白秋居にて

著者識



# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 5」岩波書店

1986（昭和61）年9月5日発行

底本の親本：「新頌」八雲書林

1940（昭和15）年10月15日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※底本には底本の親本の「表紙」「本扉」の写真、「中扉」の「詩集 皇紀二千六百年記念」、「中扉裏」の「八雲書林刊」が冒頭にありますが省きました。

入力：岡村和彦

校正：川山隆

2011年2月11日作成

2011年12月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 新頌

北原白秋

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>